

菊地秀行

スーパー伝奇バイオレンス

# 影人狩り

トンキチ冒険記





光文社文庫

スーパー伝奇バイオレンス

かげびと が  
"影人" 狩り

著者 菊地 秀行  
さく ち ひで ゆき

2004年7月20日 初版1刷発行

発行者 篠原 睦子  
印刷 堀内 印刷  
製本 フォーネット社

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Hideyuki Kikuchi 2004

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73710-2 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

スーパー伝奇バイオレンス

「影人」狩り

トンキチ冒険記

菊地<sup>ひでゆき</sup>秀行



光文社



“影人”狩り◎目次

PART 1	新任教師	5
PART 2	戻りし者	36
PART 3	消えちゃった	70
PART 4	“向う側”に棲む者	101
PART 5	虚数の敵	135
PART 6	“向う側”の招待	163
PART 7	帰還者たち	192
PART 8	新任教師パート2	221
PART 9	我不還 <small>われかえらざる</small>	253
	あとがき	288
	解説 笹川吉晴 <small>ささがわよしはる</small>	291





PART 1  
新任教師

1

家を出るとすぐ、カローラが突っかかってきた。門を出て右側を見ると、塀へいが切れるところに停とまっていやがったのだから、明らかに故意だ。

バス停のある通りまで七、八メートル歩いたとき、背後のエンジン音に気づいてふり向くと、もう眼の前に迫っていた。

「わあ」

横っ跳びに右へ跳んだ眼の隅を、真紅の車体が通りすぎて、他人のお屋敷の塀へいにしがみつくようにして難を避けたおれから、五メートルほど先まで行って停まった。

ドアから謝罪に跳び出してくるかと思つたら、運転席の窓から、ひよい、と銀縁の眼鏡をかけた細っこい中年男の顔が現われ、にやりと新米の教師みたいな笑みを浮かべやがった。

5  
どいつに頼まれたやくざか知らねえが、いい度胸だ。

おれはドラム・バッグごと擱つかんだ木刀を左手に、カローラの方へ近づいていった。木刀ケースのジッパは、いつも外してある。

だが、一メートルも行かないうちに、そいつは、もつと深い、もつといやらしい笑みを見せると、たちまち車内に戻り、エグゾースト・ノズルが青いガスを吐いた。

「待ちやがれ！」

おれがダッシュをかけたときは遅かった。疑似轢ひき逃げ犯ともいうべき悪趣味なカローラは、まるでF1みたいに豪勢な排気音をたてて、角を曲がり、姿を消してしまったのだ。

こんな日に限ってロクな日に遭あわない。今度は豚ぶたと狐きつねが襲おそいかかって来やがった。しかも、よりによって鎮守ちんじゆの森の中で、だ。

おれの通う高校は、新宿から私鉄の急行で約五〇分のT市の一角にある。築——じゃねえ、創立八〇年というのが名門の資格になるかどうか知らねえが、校長もPTA会長もそれが自慢らしく、事あるごとに口にする。田吾作が。八〇歳のガッコ出て、受験や就職が楽になるとでも思っおもってやがるのか。

そのくせどいつもこいつもケチ臭く、校舎の一部は、木造のままだし、近くの山ひとつ崩して道路を、という知恵も働かねえもんだから、交通の便は最悪だ。

市の中心からバスで一時間、いちばん近くの団地からでも一五分はかかる。とどめは、バス停から校門へと到る道で、徒歩一〇分のうち最後の五分は深い森だから、そこを抜けると、



みな、生還した遭難者みたいな気分になる。大した登校ルートだ。

おれが狐と豚に襲われたのは、そのルートの途中にある、そこだけ切り拓いた古寺の境内ふるでら けいだいだった。

これも黴臭かびくささが自慢の住職の話によると建立こんりゆう後五〇〇年の由緒正しき真言宗の一寺というが、おれには貧乏坊主が巣くつてる廃寺としか思えねえ。

クラス委員の安藤を脅おどして話を聞いたところによると、江戸時代、幕府の締めつけで賭場が開けなくなったやくざどもが、役人の手の及ばぬ貧乏寺や神社の一角を借りて人を集めた。よく映画やTVのやくざが、賭場を開くのを「ご開帳」というのはこのためで、そもそも開帳というのは、その寺の秘仏を何年かに一度一般に公開することを指すそうだ。この寺——円法寺という——も、これくらいのこたあやっているに違いない。そう思わせるくらいのはる寺なのである。

今日は月曜日だから朝礼がある。そんなものに出る時間は当然、眠りに使った。

寝呆まなこけ眼で寺の参道前にさしかかったとき、その奥から、

「ねえ、早く来て〜〜ン」

と妙に鼻にかかった女の声でしたのである。

靴箱におかしな手紙を入れとく女どもは、上級生、同級生、下級生を問わず、米軍基地の厨房ちゆうぼうのジャガイモほどもいるから、その一人がおかしな手を考えつきやがったなど、おれ

は無視して歩き過ぎようとした。

途端に声が変わった。

鋭く短い打撃の音とともに、

「痛い、やめて、ああーっ、虐めないでえ！」

と苦鳴の叫びが流れて来たのである。

朝っぱらから寺途中で何してやがると、おれは——ある種の期待も抱いて——参道を走り抜けて、境内へ跳びこんだ。

貧乏寺のくせに古さを自慢するだけあって、敷地はかなり広い。噂では三〇〇〇坪を越すという。代々の住職しか知らない、或いは彼らさえ無知な石仏群や古墳まであるという話も、満更嘘じゃなさそうだ。

二〇〇メートルもある参道の両側には苔むした石燈籠が立ち並んでいる。それを抜けて境内へ入った途端、左右から黒い影が躍りかかってきた。

次の瞬間——何か右頬と左顎をかすめ、おれはぎりぎりまで膝を曲げて、かわした。

右手には愛用の木刀。いつ抜いたかはわからない。

右側にガスタंकみたいなでぶ。左側には細面で細い眼がつり上がった瘦せつぼち——それぞれボクシングと空手の構えを取って、おれをにらんでいる。

「こらあ、ふうとかコンとか鳴いたらどうだ？」

とおれは我が校の先輩——工業科三年の沢田地呂兵衛と芥川忠吉あくたがわちゆうきちに向かつて言った。こいつらの両親が、なんでこんな名前をつけたのかは、永遠の謎だ。

「朝っぱらから、手のこんだ真似しやがつて——いつてえ何の用だ、この糞工業科」  
とおれは、豚——ジロベエ——と、狐——チューキチ——に訊きいた。

「天のお告げにより——おまえを処分する」

と豚がセミクラウチのスタイルを取つて、ステップを踏みながら宣言した。学ランの下の腹がゆれている。ダイエットのためにボクシングしてるとしか思えない。

「おれたちは、そのための戦士だ」

と猫足立ちのチューキチがつづけた。

おれはため息をつき、

「飽きもしねえでよく来るな」

と苦笑せざるを得なかつた。

こいつらとその仲間は、この一年と半の間に一〇回以上おれに喧嘩けんかを売り、全敗のレコード・ホルダーを誇っている。思うさまぶちのめして、手足をへし折つたのも二度や三度じゃない。このところ、なりを潜めていたから、ようやく実力の差がわかつてきたかと思つてたら、これだ。

多分、あんまり派手にぼこぼこにされたせいで、脳みそがゆさぶりをかけられすぎ、ひと

昔まえに流行<sup>はや</sup>った「戦士シンドローム」にかかったんじゃないかと、おれは少し心配となつた。

「戦士シンドローム」というのは、あるオカルト雑誌の記事が発端となつて生じた現象で、自分がかつて人類のために戦った超戦士の生まれ変わりじゃないかと思ひ立つ連中が続出——共に戦った友や恋人を求める声を、この手の雑誌のお便り欄に続々と掲載しはじめたものである。おれに言わせりゃ、受験勉強でおかしくなつた餓鬼<sup>がき</sup>どものママゴトだが、当人たちはそのじゃなかつたらしく、何のつもりか自殺者まで出すに及び、雑誌が自主規制を開始し、ようやく鎮火した。——というのは表向きで、おれのクラスにも、ボクは古代戦士マガワイの生まれ変わりだとか言つてるのがひとりいる。こいつらも、そこらへはまり込んだに違いない。

「さっきの声は、こいつか？」

おれは木刀で、チューキチの足下をさした。テレコが置いてある。サンミヨ一の安物だ。「そうだ。まんまと引つかかりやがつて。このど助平が。凄<sup>すご</sup>いSMショーだと勘違<sup>まちが</sup>ひしただらう」

「もつといいとこの買えよ。パイヨニヤかシヨニーがいいらしいぜ」  
「う、うるせえ。問題は中身だ」

とチューキチは喚<sup>わめ</sup>いた。

「お、おれなんか、毎日聞いてコーフンしてるんだぞ、<sup>すげ</sup>凄えだろ」

「毎日？——一体、どっから録<sup>と</sup>って来たんだ？ 新宿のSMクラブか」

「ばーか。おれん家の父<sup>と</sup>ちやんと母<sup>かあ</sup>ちゃんの声だよ」

一瞬、間を置いて、

「おめえん家の——父ちゃん？」

「——と母ちゃんだ」

とチューキチは両手を腰に当てて叫んだ。

「母ちゃんが毎晩ガーターつけて、父ちゃんの背中をハイヒールで踏んづけてるんだ。父ちゃんはお許し下さい、女王さまつって、母ちゃんは、お黙り、この奴隷<sup>どれい</sup>ブタ、さあ、今日も会社で元気いっぱい働いてきたご褒美<sup>ほうび</sup>を上げるって、父ちゃんの尻の上へ蠟燭<sup>ろうそく</sup>垂らしてんだ。凄えだろ」

「す、凄え」

と呻<sup>うめ</sup>いた。豚が——ジロベエが。おれはうんざりしたのを顔に出さないように、

「しかし、おめえ、てめえの親父とお袋のSMごっこを、よくも他人に聞かせる気になったな」

「バーカ。ちやあんと、許可は取ってあるわい」

「……………」

「父ちゃんも母ちゃんも、おまえのためになるんならつて、OKしてくれただぜ。おれは二人と一緒に戦ってるんだ」

こう言つて感動の正拳突きと廻し蹴りを見せるチューキチに、

「おめえの両親——なるべく人がいっばいいるところで聞かせるたあ言わなかつたかよ？」

「おお。それがどうした？」

やっぱり、そういう世界か。

「ま、いい。来な」

おれは木刀をひとふりした。

びゅつと鳴る。さすがに二人——いや、二匹の表情から圧倒的な自信が消えた。おれの突

きの怖さは、こいつらがいちばん良く知ってるはずだ。

改めて構えを取る。その見事さよりも、二人の全身から漲みなぎる気迫めいたものが、おれを

驚かせた。

今までとまるで違う。別人のようだ。最後にシメたのは、ざつとふた月前。それから、こいつらに何が起こつたんだ？ さつきのパンチと蹴りも、おれの反射神経が万分の一トロかつたら、もろ食らつて地べたに大の字だぜ。

少し本気になった。——つうのは、内臓破裂も仕方がないかな、くらいの意味だ。骨を折るくらいは、本気の内に入らない。

豚と狐もそれは察したらしく、凶気はさらに濃く——噴き上げるほどの勢いになった。やっぱりおかしい。こいつら、絶対、憑かれてやがる。このぼろ寺のせいか。どうも、そうじゃなかったらしい。

二匹の凶気が極限まで煮つまり、どっちが先だと、おれが眼を閉じたとき、  
「おーい、何しくさってるだ？」

と間のびした男の声がかかったのだ。

「住職だ」

「畜生——おい、和久井、また挨拶に来るぜ」

「ああ。今度はおめえの姉ちゃんと妹のテープを持って来な」

「よ、よし、わかった」

と豚がうなずいたので、おれは驚いた。そっちはこいつの担当か。

「おーい」

とまた声がした。

身を翻ひるがえして参道を駆け去る二匹を見送っているところへ、

「何だべよう、おみゃーらは。仏様のいる場所を喧嘩の道具に使っちゃなんねえど——」

と住職がやってきた。庭掃除の途中らしく、竹箒たけぼうしを手にしている。

おれは肩をすくめて木刀を仕舞った。



「悪かったな、じゃ」

「待て、こら」

肩を叩かれた。柄ならともかく、はく方だ。弾はじきとばして、

「何だ、こら？」

と凄味を効かせても、このボケじじいは平気で、

「勝手に境内で罰当たりな真似をした罰だ。浄財をしていけ」とにたにたした。

「いい加減にしろ。仕掛けてきたのは向うだぜ」

「乗ったのは、おみやあだろうが」

「幾らだよ」

金額を聞いて、おれは眼を丸くした。

「ぼったくりだ。坊主がそんな真似していいのか、おい？」

「安心せえ。除霊代も入っておるしよお」

「除霊代？」

「おお、おみやーとやり合ってた二人、あいつら、取っ憑かれてるだよ」

「何にだ？」

「わーからん。良くねえもんだ」

「そんなことたわわかってるよ。もつと具体的に言ってくれ」

「おめえを狙うんだから、おめえに怨みうらみのある悪霊だべえなあ」

「あんた一体、何県人だ？」

住職は答えず、じつとおれを見て、片手を広げた。

「何だ、こら？」

「おめえの後ろにも怨霊おんりきようが憑よいてる。ついでに落としてやるべえ。現金かねを出せ」

「いい加減にしやがれ」

その手を払うと、おれは地面のバッグを拾い上げ、さっさと背を向けた。

「待て、こら」

と住職の声が迫ってきた。

「この罰当たり。おみやあの今日いちにちは、最悪の厄日やくびだぞ。仏さまがそう言うてるでお」

阿呆。仏たが崇たるか。

参道を出る頃には、おれはもう二匹と住職のことなど気に止めない精神状態に戻っていた。

## 2

誰かがおれに気付いた途端、妙にざわついてたクラスに一瞬、静寂が走った。